

『ミスターサマータイム』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

北朝鮮の暴挙に対する韓国とアメリカの協調。ロシアの駆け引きなど、不穏な時代が訪れているにもかかわらず、日本の「夏の終わりのハーモニー」は、自民党以上に低迷する野党第一党で、前原誠司・新代表率いる民主党の目玉人事であったはずの山尾志桜里代議士の禁断愛に関する話題である。

ハーフレントのベッキー以来、ハンディキャップパーソンの乙武さん、世界の渡辺謙さん、魔性の女・斉藤由貴さんと、好きものっぽいタレントの火遊びに比べれば、今回の山尾代議士の一件は、政党人事を揺るがしかねない大事件であり、民放によるワイドショーの色物ネタを超越して、国営放送の政治コーナーでも、言葉が選ばれたうえで、真実を明らかにし、出処進退を定めるようにと窺められている。

それにしても山尾代議士に、不倫のイメージは全くなかった。その出自、学歴、職歴を見れば、そういうことをしそうでしなさそうな（どちらだろう）人物像であった。だが、その知的な美貌に、相手がやり手イケメン弁護士という話題性が加わり、報道がヒートアップしているのだから。

それにしても、恐るべきは週刊文春と、そのライバル誌である週刊新潮である。1978年の夏に流行ったコー

ラスグループ「サーカス」の「Mrサマータイム」という曲をご存じだろうか？ 世紀を超えた現在でも、夏になるとラジオで時々流れるバラードの名曲である。自分の記憶には、確か、さびの部分化粧品の会社のコマーシャルに使われたように残っているが、とにかく洒落た曲である。

それもそのはず、元々、この曲はフランスのミシェル・フュガンの『Une Belle Histoire (愛の歴史)』の日本語カバー曲である。

規範に従い、歌詞を誌面にお披露目することは出来ない、是非ともカラオケで、身近な妙齡美人に唄わせてもらいたい。

内容は不倫を悔やむ女性の心情を歌った楽曲であり、詩の内容を解釈すれば夏の日の出来事を擬人化した曲である。ミスターサマータイムは姿の见えない亡霊として、毎夏、一瞬、魔が差し、うっかり不貞を犯した大人の女性を、とことん苦しめるところの、かなり残酷な内容である。そして結局、主役の女性は本命男性、間男のどちらを最終的に選んだのかが分からない意味深な歌詞である。

昨今の不倫騒動。いつのまにか女性のよろめきが主役になっている（男の浮気は、ハリウッド男優であっても思

考が単純で歌詞にもならない）。一連の騒動に触れ、20歳の時におませな同級生から勧められ、ブレイク前に聴き入ったこの曲の重さを、60歳を前に突然、思い出した。

それにしても、一線を越えたか越えないか（直訳すれば肉体関係の有無）。今年の流行語大賞候補かもしれない。ばかりが追及され、弁解するシーンが散見されるが、持ちの男女が、一晩、世間話だけで過ごしている方が罪深い気がする。日本を良くする雑誌の誌面に不謹慎な内容を記し恐縮に存じます。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院www.ito-hospital.jp 大須診療所(名古屋分院)www.osu-shinryoujyo.jp

